

RESSH

(RESEARCH EVALUATION FOR
SOCIAL SCIENCE AND HUMANITIES)

出張報告

2017.7.6-7

大澤由実・佐々木結

京都大学・学術研究支援室

概要



- RESSH2015に続き、2回目となるRESSH2017には、ヨーロッパ各国から100名近くが参加。域外からはイスラエル、南ア、日本のみ。
- COST*の4年間の大型ネットワークプロジェクト、ENRESSHが2016年に立ち上がりその枠組みでの実施。

* COST (European Cooperation in Science & Technology) :

ヨーロッパ各国の研究者、技術者、学者の国家を超えた協力を支援する枠組み。



まとめ

- 参加した多くの国で、すでに国レベルで補助金の配分と連動した数値指標による**評価システムが導入されており**、導入後の出版行動の変化（英語出版の増加、高インパクトジャーナルの選好など）を検証する発表が複数あるなど、数値指標による研究や大学そのものの序列化が進んでいる印象を受けた。
- 指標に関しては、書籍の計量書誌化が中心的テーマの一つとして注目されていた。
- 非英語圏ヨーロッパの人社系研究は日本と同様の課題を抱えるが、**英語化**については近年研究評価制度の普及と相まって加速度的に広まりつつあることがわかった。
- アメリカ、イギリスを始め世界中で外部資金評価に使われている「**インパクト**（波及効果）」について、その効果の検証と人社系評価に即した枠組みの検討につき、Horizon2020を使った大きなプロジェクトが進行中とのこと。セッションでは言語学者による実証的なケーススタディもあり、評価最前線の動向が確認できた。

書籍評價

Alesia Zuccala, Mads Breum, Kasper Bruun and Bernd T. Wunsch
The Functional Requirements for Bibliographic Records (FRBR) Framework for Indexing Monographs: Implications for the Book Citation Index™ and Metric Evaluations

- 書籍をbibliometricsに入れるときに検討すべきことを具体的に検討。
- (DOI付与があるウェブジャーナル含め) 唯一無二のものとして認識されうるジャーナル論文と異なり、学術書は、重版して第二版、第三版と複数版ができたたり、著作権を海外に移して出版する場合や、自書の翻訳など、同一の書籍と考えるかどうか難しい場合がある。
- この発表では、何をもって新たな著作とするか、著者へのインタビューも含めてある程度の分類をし、書籍のビブリオメトリクス化を試みていたもの。
- たとえば、オランダ語で出版した書籍を英語に翻訳した場合、原書とは別のimproved versionになったと著者自身が認識するケースがあり、それであればやはりnew workとして認められるべきであるし、また、重版に際しても、大幅に修正を入れるケースもあり、それもnew workとして考えられる。→出版年、言語が異なればNew workとする、などの議論があった。

計量書誌学における書籍の位置づけ：テクニカルだが具体的で実証的な方法論確立へ向けた注目すべき研究

Ioana Galleron, Geoffrey Williams,
Elea Gimenez Toledo, Jorge Manana Rodriguez and Antonella Basso
The language of books in the SSH: publication trends in France, Italy and Spain

- フランス、イタリア、スペインでの出版傾向について。論文では、フランスは80%、イタリアは75%が国語、書籍では、フランスは90%、イタリアは80%が国語。書籍では特に、出版言語は国語であることが多い。論文同様、書籍でも英語出版が増えつつあるが、主流は国語。
- スペインにおける書籍の分野別翻訳状況を見ると、経済学では多く（7割）が英語に翻訳されているが、法学では英語への翻訳が少ない。法学ではむしろ、ドイツ語、イタリア語への翻訳が英語の倍以上となっている。
- 研究評価システムとの関係ではどうか。研究評価において、言語の多様性を反映できているか。英語へのバイアスがないか。データが不足しているが、評価で高く評価されているものは比較的英語が多い傾向にある。たとえば、イタリアの書籍の評価の場合、高評価を受けているのは英語35%、イタリア語24%、他の言語29%で、英語が比較的高いが絶対とは言えない。いずれにしてもデータが不足。
- トップダウン型の国際化は問題が指摘されているが、Scopusなどのインデックスでは国レベルの評価を把握できない。

各国出版言語変化：
分野別特性が特徴的だが
データ不足が課題

Howard D. White Libcitations, WorldCat, and Cultural Impact

- Libcitationsと文化インパクト。Libcitationsは発表者Prof Whiteの造語で全世界の大学図書館の購入履歴をデータベース化し、購入履歴を図書館員によるレビューと見なし、様々な角度から指標としての適格性を検証。
- WorldCat(世界の図書館の蔵書目録)とARL(Association of Research Libraries)蔵書を用いた分析の発表。
- 書籍とそのメタデータ（タイトル、著者名等）は「content-laden cultural intelligence(内容を持った文化情報?)」であり、「Libcitation」は内容的に中立な指標。
- 質問： 具体的にどうやって利用するのか。→大学のRepositoryに入れることも可能だろう。技術的にどうリンクするのは未開発。

全世界の大学図書館の購入履歴から書籍評価を指標化。ユニークな試みだが、今後の展開については疑問も

Elea Giménez-Toledo and Jorge Mañana-Rodríguez How Spanish book publishers select their monographs?

- スペインの出版社500社に書籍出版の基準を調査。
- 一般的に、ジャーナル論文と比較した場合、論文は学術的価値、読者の関心、引用可能性を基準とするのに対し、学術書の出版社では、学術的価値、売上げ見込み、市場調査、出版費用など検討すべき基準がより複雑とされている。
- 調査結果は、各出版社ともほぼ類似の基準を用いていたが、それぞれの重みづけを見ると、**大学出版会とそれ以外で違い**がみられた。
- 大学出版会では、出版補助を受けているため、学術的価値と読者の関心により評価の重みが付けられるのに対し、一般の出版社では、より売上げ見込みに重みが付けられる。
- 結論
 1. 外部評価に関しては、ピアレビューはより頻繁に使われる方法。
 2. たいてい評価軸は複数
 3. 類似点はあるものの、大学出版会は出版社の意見を取り入れることは多くない。
 4. 大学出版会は、評価基準をウェブサイトで公表しているところが多い。
- コメント：ピアレビューの中で著者がどういう経験をしたか、聞いてみると面白いかもしれない。

スペインの出版社500社に調査したが、結果は特にユニークでなく、もったいない印象。

インパクト

Smári Sigurðarson

Director of Research, School of Humanities, University of Iceland

Drowning by Numbers: Evaluating Social Capacities



- アイスランドの研究評価システムでは、アウトプット重視。研究評価は雇用契約にもリンクしており、アウトプットで何ポイント取ったかで毎年9月のボーナスが決まる。
- 人文学におけるインパクトを把握するにあたり、そもそも評価の正しい方向性とは何かを見定める必要がある。
- 人文学研究の究極の目標は「よい社会」。よい社会は「**社会的潜在能力（Social Capabilities）**」を通じて実現される。
- UNESCOの「Social Transformation（社会変革）」にかかるプログラム。グローバル時代におけるSocial Inclusion、Social Innovationによる社会の変革をプログラムの柱とする。
- このSocial Transformationをもたらすものとして「社会的潜在能力」の概念を用い、creative alternativeを考えてみる。人文学研究において生み出される社会的潜在能力とは？人文学研究から特定の社会的潜在能力へのリンク＝教育が担うことができるか？評価のプロセスを通じて、価値を生み出さず「目標のすり替え」が行われていないか。結果的に社会的潜在能力を阻害することになっていないか？
- 潜在能力概念とインパクトを重ね合わせると、Global/localのバランスが必要。潜在能力は、**時間をかけて特定の場所で培われる**もの。潜在能力は、研究者から他者へ「何か」を単に移すことで培われるものではない（※キャパビル＝能力開発とは異なる）。潜在能力は、**特定の場所で、特定の時間軸で、個人と社会との持続的な関与によって培われる**。国際化のしすぎも問題。
- 大学は「Epistemological virtues 認識論的美徳」を体現。オープンマインドさ、謙遜、勇気、正義、創造性といった美徳は、**常に特定のコンテキストにおいて培われる**。人文学は国境を越えてこうした価値を共有。

人社系における評価、特にインパクト評価の意義に疑問提起。潜在能力概念を使うことで人社系の特徴を浮き彫りにした興味深い研究

Gunnar Sivertsen

Frameworks for understanding the societal relevance of the humanities

- NIFU (Nordic Institute for Studies in Innovation, Research and Evaluation) 所属。
- ノルウェーでは昨年初めてイギリスのREF2014と同じインパクトケーススタディのシステムを導入した。
- EUのFP7 (2007-2013) で研究支援のあった、SIAMPIプロジェクト (Social Impact Assessment Methods for research and funding instruments through the study of Productive Interactions between science and society) の成果も反映して？
- ノルウェーでは、Normal vs. Extraordinaryインパクトという概念を使用。具体的には、シリアの古代遺跡の保存プロジェクト、通常の文脈であれば「普通のインパクト」。それが、ISISの攻撃で遺跡が破壊され、プロジェクトのカウンターパートであった現地の役人が殺害された。となると、「特別のインパクト」=Narrated impact
- 人文学の強みは、社会に直接働きかけられること。文化、教育、メディア、公共圏、外交、観光、社会の記憶と、人文学のインパクトは多岐にわたる。
- コメント： REF2014を参考にしたとのことだが、REFでも疑問に思っていたが、**ネガティブインパクトはどうとらえるのか**。LGBTや人種に基づく差別や、狭量なナショナリズムを助長するような研究があるとして、それが社会に与える大きなインパクトをどう評価するのか。研究内容が適切なピアによる評価を得たものであるというプロセスによる選別を期待するのは不毛。「適切なピアレビュー」を経た形にして、**ネガティブな研究はいつでも出てきうるし、現に存在もしている**。どのインパクトがポジティブだという評価を誰がするのか。

ノルウェーにおけるインパクト評価の紹介。インパクトのとらえ方については議論の余地あり。

Paul Benneworth*, Julia Olmos-Peñuela and Reetta Muhonen
*Senior Researcher at the Center for Higher Education Policy Studies,
University of Twente, Netherland



Towards a common understanding on the societal impact of SSH research

- ノルウェーの哲学者アルネ・ネスが1970年代に提唱したエコロジーの概念を引き継ぐオランダ緑の党が2017年3月の総選挙で躍進。人文学が社会に与えるインパクトは、現実社会で日常的に確認できる。
- しかし、最近のインパクトの大流行（OECD、EUのCOST/ENRESSH、ノルウェーNIFUのR-QUEST、オスロ大のOSIRIS（Oslo Institute for Research on the Impact of Science）Horizon 2020のACCOMPLISSH（ACcelerate CO-creation by setting up a Multi-actor Platform for Impact from Social Sciences and Humanities））が拙速で十分な議論なく進められていることに懸念あり。
- AUTM2015で、十分な議論もなく導入された研究の商業化（＝産連？）指標が広く使われているが、一度立ち止まってその意義、含意を十分に考える必要がある。
- 研究によるインパクトは、本来研究者が何らかのアクションを取るからではなく、その研究の受け手、ユーザーが何らかのアクションを取るから起こり得るもの。研究自体ではなく、研究の受け手である人々がどう行動するかを見るべきでは。
- **ENRESSHプロジェクト**（COSTの4年間のプロジェクト。2016.4～2020、31か国参加）で、SSHの評価とインパクトについて検討。特にWorking Group2では、社会的インパクトを検討。インパクトの分類、17か国65の事例を集める。今後3年間で、評価枠組の作成、分類・要素・組立てを完了。インパクトへの道にかかる研究者の経験（インセンティブ／障害）を記録、インパクトにおいて市民が見えるような方法、仕組みを特定。

ENRESSHプロジェクトに注目！
人社系のインパクト評価の将来は、ここから出発か？

Marta Natalia Wroblewska

University of Warwick, Centre for Applied Linguistics

Staging research impact. How academics write and talk about the wider impact of their research in the context of REF



- REF2014におけるインパクト評価について。評価割合は、アウトプット65%、環境15%、インパクト20%と、初登場のインパクトの割合が大幅に増えた。
- この研究は、アカデミックディスコースにおける応用言語学。インパクトが初めて現れた時、アカデミックディスコースにおいて新しいジャンルが登場したため、ジャーナリスティックに書くべきか、どう書いたらいいのか、研究者は混乱。言語学分野における77のインパクトケーススタディをジャンル分析。
- 最も一般的な特徴は、数字（購読者数が1万以上とか、ラジオのリスナーが600万人とか）。特に、millionという単位が多く、当然ながらImpactという単語も多かった（pathways to impact, impact infrastructure, to impact on）。ポジティブな単語(huge, invaluable計り知れない, path-breaking先駆的な, world-leading世界トップレベルの, innovative革新的)が多く、マクロ構造としては、状況-問題-反応-評価、という構造。すべて退屈！
- これらすべてに共通するのは、おとぎ話でリサーチヒーローが問題を解決する話（fairy tales of research-heroes）、ということ。でも退治すべきドラゴンは不在。

REFインパクトの現実について、実証的に分析した先駆的研究。欧州各国も注目する評価先進国からの問題提起に注目度が高い！

Marta Natalia Wroblewska Staging research impact. How academics write and talk about the wider impact of their research in the context of REF



これらのケーススタディが示すのは、以下の特徴。

- 直線的（説明からは課題が抜けている）
- 目標指向型&インパクトが強い（serendipityは??）
- 人が不在（「研究が行われた」「インパクトが達成された」）
- 真面目（ユーモア無し）
- 素晴らしい&transparent(research quality indicators)なんでも「素晴らし」く、OKなんてことはない。

この研究について、インタビューしたときの作者の反応

- 「説得的に書くように言われたから説得的に書いたつもり」
- 多くの研究者は自分の書いたケーススタディから距離を置いた感じ
- 皮肉、隠喩などなど。でも誰も嘘を書いたとは言わない。ただ「違う現実」というだけ。
- インパクトについてはみんなポジティブ。「社会にインパクトを与えたいんだ」

結論： **インパクトアジェンダを取り巻く言語使用の現状の危険性**

- 研究のビジョンが素晴らしく、インパクトが強いことに対する正常化
- インパクトがなく、素晴らしくなく、結論の出ない研究はどうなるのか

各国評価

Emanuel Kulczycki, Ewa Rozkosz and Aneta Drabek Ostensible internationalization of journals in the social sciences and humanities in Poland as a result of the Polish Journal Rankings

- ポーランド国内における研究評価ポリシーの影響を受けたSSHジャーナルの国際化についての批判的な発表。
- ポーランドの「Performance-research funding system」の鍵となるのが、国内ジャーナルランキング。ジャーナルの国際性（言語、外国人著者、外国人の査読者、Editorial boardメンバーの国籍etc）はランキングを上昇させるために重要で、ポーランド国内のジャーナルは急速に国際化が進んだ。
- ポーランドでは、1つの大学が250のジャーナルを（日本の紀要のようなもの？）発行している場合がある。
- 結局は国際化といっても見せかけだけ、点数を稼ぐためだけの国際化が多い。例えば、名ばかりの外国人のboardメンバーや、近隣国の外国人共著者など。近隣国でもジャーナルを巡っては同じであるため、お互い名前貸しなどが散見される状況。表面的な国際化で、ゲームをしているだけの結果となっている。

ポーランドの評価システムにより「表面上の」国際化が広まりつつあることについての批判。この傾向はスロバキアでも共通。

Elea Giménez-Toledo, Jorge Mañana-Rodríguez, Elba Mauleón Azpilicueta, Daniela De Filippo and Elias Sanz-Casado
Proposal of an assessment model for scholarly publishers applied to university scientific output

- スペインにおける、各大学内での研究評価の方法は、**各大学の裁量**が認められているが、評価は研究者個人のインセンティブや、特定のプログラムの推進のために用いられる。
- スペインではSPI (Scholarly Publishers Indicators) というSSHに特化した学術出版に関する指標・ツールのシステムがある。
- Carlos III大学における出版 (モノグラフ、チャプター) のアセスメントモデルを提案するための分析発表。出版社の評価においては、威信 (prestige) があるかどうか、各分野におけるoutputの量、マニュスクリプトの選別の過程、という3つの指標が考えられる。



Jaroslav Šušol and Marta Dušková Impact of performance-based funding on publication patterns: Money changes everything...?

- スロバキア政府は交付金配分方法を毎年公表するが、その基準は毎年変わる。その変化が大学教員の出版傾向にどのように影響を与えるかを調査。
- 調査対象は国内全35大学で、回答を得られたのは34大学。2007-2016年の間に出版された510,647件。調査に利用したデータベースはwww.crepc.skで参照可のビブリオメトリクス。書籍、論文(current contents connect journals (CCJ), regular journals (JOUR), edited books (EDI))、学会プロシーディング(CONF)、特許書類、書評など。
- 仮説：どこかであきらかに出版傾向が変わった時点があるのではないか。SSHとSTMの違いが明確に存在するのではないか。SSHは言語が複数であるのに対し、STMはより国際的ではないか。
- 分析：言語、出版国、SSH（芸術学、法学、教育学、経営学、社会科学）とSTM（自然科学、数学、物理学、情報学、医学、薬学）で違いがあるかどうか。
- 交付金配分方法の変化：
 - 2007まで： 4カテゴリーのうち、単著は1/6の重みづけ
 - 2008： 単著重みづけ他のカテゴリーと同等化
 - 2011： CCJの評価比重が増加。単著も若干高くなるが明らかに**より海外の論文の評価比重が高くなる。**
 - 2015： **単著の重みづけがCCJと完全に同レベルになる。**

小さい国のケースだが、国家レベルの評価が確実に出版傾向に変化をもたらすことにつき、警鐘を鳴らす重要なケーススタディ。



Jaroslav Šušol and Marta Dušková Impact of performance-based funding on publication patterns: Money changes everything...?

結果は、

- ゆっくりだが確実にジャーナル論文が増えている。全体の $\frac{1}{3}$ がWeb of Scienceにある論文
- 海外論文というカテゴリーに入れるため、隣国チェコでの論文が増えるなど、懸念材料があることが明らかに。国際的出版であっても国際的インパクトはほとんどない。
- SSHでは学会プロシーディングが確実に減少。国内ではCCJ論文が増加。言語も複数。

結論：

- 従来のSSH、STMの出版傾向の差が引き続き確認された（出版カテゴリー、言語の選好）
- 評価指標に合わせ確実に出版傾向は変わっている。
- 交付金配分方法に応じた明確な変化地点（sharp break point）を特定することはできなかった。

コメント：

- 国際ジャーナルの定義については、編集委員会の構成により、National / international (チェコ人のみのジャーナルであればnational)と分類するのがいいのではないか。

Antonio Ferrara and Marco Malgarini Changing publication practices in SSH: Evidence from two consecutive national research assessment exercises (VQR 1, 2004-10; VQR 2, 2011-14)



- ANVUR (National Agency for the Evaluation of Universities and Research Institutes, 大学システムの評価研究の国家機関)所属
- イタリアの研究評価プロセスは出版傾向を変えたか。外国語による出版に変化はあったかを検証。
- VQR : **イタリアの全国研究評価制度**。テニュア・ノンテニュア全員が研究成果を提出。これまで2回実施。VQR1は2004-2010年、VQR2は2011-2014年。

結果

- **イタリア語出版の割合**が69.9%から61.5%に**減少**。英語出版は24.3%(2004-2010年)から33.6%(2011-2014年)に**増加**。
- 分野別にみると、建築学は11.3%増加し33.8%に。一方、法学は7.9%で、2.1%しか増えていない。
- 言語別に評価レベルを見ると、英語によるアウトプットの平均は最も高く、イタリア語によるアウトプットの平均スコアは最も低い。
- WoS/Scopus掲載のジャーナルへの出版割合は、VQR2でほぼ倍増、10.4%から18%へ。
- 個別にみると、WoSジャーナル論文は8.1%から11.6%へ。Scopusジャーナル論文は9.6%から17%へ。

Antonio Ferrara and Marco Malgarini
Changing publication practices in SSH: Evidence from two consecutive national research assessment exercises (VQR 1, 2004-10; VQR 2, 2011-14)



- 論文、著書、分担執筆という出版ジャンルで見ると、論文が9.5%増加。著書、分担執筆はそれぞれ4.9%、2.5%減少。全体的には、著書及び論文は、その他のジャンルと比較して高い評価。経済学ではジャーナル論文が著書よりも高い評価。

結論

- イタリアのSSH研究者は、「英語」で、「論文」を投稿する傾向が強まっている。
- WoS/Scopus掲載のジャーナルへの投稿が大幅に増加。
- 書籍はほぼ全分野において論文より高く評価されているが、経済学と統計学では論文の方が高評価。
- ただし、こうした変化が評価制度だけによるものかどうかは検証が必要。

Q&A

- 研究者に与えられるインセンティブは？：昇進の際に参考とされる。Aクラスジャーナルであれば評価が高い。
- 制度導入当時、イタリア全土で抗議運動があったと記憶しているが、現在は？：導入当初は抗議運動があり、出版物を提出しない研究者もいたが、大きな影響はなかった。現在ではみなそれを受け入れている。

Jon Holm and Heidi Dybesland

Research groups in SSH – A typological analysis of 220 groups submitted to national research evaluations in Norway

- Research Council of Norway : 全国全分野の研究評価を、研究分野ごとに10年に一度実施。人社系では、基本的には広範に文献を読むピアレビューだが、2015年からはCRIStin, Scopusを使ったビブリオメトリクスによる評価も加わった。その他、研究グループ、一部の文献読込み、研究と教育の関係、REF2014モデル取り入れた社会的インパクト。
- 目的は、研究の最先端を記録すること。研究の質を高めること、研究者にとってのナレッジベースとすること。その他付加価値として、国際的なピアによる外部からの視点の導入、研究機関間の比較が可能になることなど。
- 最近2つの評価についてここでは発表。人文学2015-17 (54 peers in 8 panels)、社会科学2016-18 (47 peers in 6 panels)

ノルウェーの研究評価において「研究グループ」に着目したメタ評価。「研究グループ」の概念は、外部資金ではより積極的に推奨されている様子。

Jon Holm and Heidi Dybesland

Research groups in SSH – A typological analysis of 220 groups submitted to national research evaluations in Norway

目的：各分野で国際的に先導的なグループを特定し、分野及び研究機関をまたいで広がりのある研究を特定する。

- サイズ・構成： 最低5名の研究者
- 評価を提出した研究グループ：人文学 (97 research groups): 38% v the researchers take part in a research group、社会科学 (135 research groups): 30%
- 研究グループに関する研究：大学での研究において、研究グループは必ずしも重要とは認識されていないなか、研究グループを組織するのは、1) 研究の質強化、2) 研修を促進、3) 学際研究を刺激、という3つの理由。
- 研究グループへの参加割合：人文学では、文学13%、哲学と科学技術研究59%、メディア研究55%。社会科学では、経済学21%、社会人類学47%。年齢別分類を見ると、教授等シニアクラスが多く、半数以上がPhDを含まないグループ。
- 外部資金との関係を見ると、より高いスコアを取っている研究グループがRCNの資金を取っていた。

Eriko Amano, Ayako Fujieda, Natsuko Inaishi, Toshiro Kamiya, Akiko Morishita, Asa Nakano, Yoshimi Osawa and Yu Sasaki

The Quest for 'Research Quality' in the Social Sciences and Humanities : A Japanese perspective

報告内容

- グローバルな標準化VSヴァナキュラーな多様性
 - 2015年文科省通知後の、「人社系の危機」に関する論説
 - 日本の人社系研究の国際化： 分野による英語発信の偏り
 - Ishikawa and Sun (2016) 'The Paradox of Autonomy: Japan's Vernacular Scholarship and the Policy Pursuit of "Super Global"'
- 2017年6月日本学術会議「学術の総合的發展をめざして—人文・社会科学からの提言—」：
 - 研究成果の公開・共有・可視性の向上を図り、分野の特性に応じた評価指標を確立させるべく努力しなければならない。」
- 日本の人社系研究評価再考： 「人文・社会科学系分野のアウトプット特性に関するヒアリング」の紹介



「国際化」に関しては、非英語圏のノルウェー、イタリアなどからコメントがあり、同じ問題を共有していることを再認識。

Janne Pölönen, Tim Engels, Raf Guns, Gunnar Sivertsen and Frederik Verleysen

Impact SSH journal publishing in Flanders and Finland

- フィンランドとフランダース地域のSSH論文出版の比較。フィンランド、フランダース両方で、英語論文出版数は増加傾向にあるが、フランダースでのWoSシェア率は減っている。Non-WoS論文もVABB-SHW(フランダースにある大学に所属する研究者のSSH出版データベース)に含めるというfunding schemeが影響している可能性がある。
- その他両国・地域のfunding schemeのあり方が、共同研究のあり方にも影響をしている可能性があるが、共同研究の文化がそれぞれ違う事もあり一概には言えない。

Thomas Franssen and Paul Wouters
Representing the humanities in bibliometric scholarship

- 「Bibliometric研究」とその変容についての発表。
- 「Bibliometric研究」の初期は、人文学に関する研究はほとんどなかった、etc 「Bibliometric研究」という分野が研究の対象になっているのが面白い。

参考

ENRESSH (European Network for Research Evaluation in the Social Sciences and the Humanities)

概要： EUのCOST ACTIONプログラムの一環で進行中「人社系研究評価のためのヨーロッパネットワーク」。アカデミアと社会における社会科学と人文学（SSH）の真の位置づけを実証することが課題。そのため、現在ヨーロッパのさまざまな地域で開発中のSSH研究評価に関するベストプラクティスや結果を情報交換することで不必要な重複を避け、さまざまな作業をまとめる。特に以下を目的とする：

1. SSH研究の多様性と豊かさを考慮に入れて評価手順を改善する；
2. SSHが社会に価値を付加する方法をより堅実にする；
3. SSH研究者の研究アジェンダをより適切に適合させ、断片化を克服するのを支援する。

- WG 1: SSHの研究評価のための概念的枠組み
- WG 2: 社会的インパクトとSSH研究の関連性
- WG 3: SSH研究を理解するためのデータベースとデータの使用
- WG 4: 普及

- Start of Action: 08/04/2016
- End of Action: 07/04/2020
- EU域内?35か国、隣接国1か国、国際パートナー（メキシコ、南アフリカ）
- COST ACTION 'ENRESSH'国際メンバーに？
- 少なくともウォッチしていく必要あり。

今回のRESSHはこのENRESSHの一環として開催。